

Title	ひとつではない哲学〈中之島哲学コレージュ〉
Author(s)	松川, 絵里; 小菅, 雅行; 本間, 直樹
Citation	Communication-Design. 2012, 6, p. 17-36
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10931
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ひとつではない哲学〈中之島哲学コレージュ〉

松川絵里 (大阪大学コミュニケーションデザイン・センター: CSCD)

小 菅雅行 (大阪大学大学院文学研究科博士後期課程)

本間直樹 (大阪大学CSCD)

This philosophy which is not one: NAKANOSHIMA Collège of Philosophy

Eri Matsukawa (Center for the Study of Communication-Design: CSCD, Osaka University) Masayuki Kosuga (Osaka University, Graduate School of Letters) Naoki Homma (CSCD, Osaka University)

「ラボカフェ/中之島哲学コレージュ」は、2008年より大阪市「アートエリアB1」にて大学・企業・市民団体の連携によって実施されるプログラムであり、その目標は、大学研究者のアウトリーチ活動や、従来の学部・大学院教育や専門教育とは一線を画する、真の意味で社会と大学の連携した教育研究活動の場を創ることである。本稿はこのプログラムの概要を示し、企画運営者の狙いや参加者の反応(アンケートとインタビュー)を具体的に検証することを通して、この試みの意義を多面的に考察する。

"Lab.Cafe / NAKANOSHIMA Collège of Philosophy" is a new kind of social learning program presented by a collaboration of university, company and NPO at "ArtareaB1" (Osaka city) since 2008. This paper shows its original concept and evaluates this trial by analyzing opinions of the participants selected from questionnaires and interviews.

キーワード

臨床哲学、多様性、対話 Clinical Philosophy, diversity, dialogue

はじめに

本論は、大阪市内で実施されている「ラボカフェ/中之島哲学コレージュ」の概要を示し、企画運営者の狙いと参加者の反応(アンケートとインタビュー)を比較検証することを通して、この試みの意味を探る。なお筆者らは、本論で扱う「中之島哲学コレージュ」の運営に中心的に関わっており、運営の立場から諸々の考察をすすめる。

■ 中之島哲学コレージュとは

■ アートエリア B1 「ラボカフェ」

ラボカフェとは、京阪電車なにわ橋駅地下に位置する社学連携スペース「アートエリア B1」を利用して、大阪大学が主催する対話型プログラムであり、コミュニケーションデザイン・センターがその企画運営を行っている。この名称を構成する「ラボ」は、「ラボラトリー(実験室)」と「コラボレーション(協働作業)」を含意し、「カフェ」は喫茶店のような飲食を提供するサービスを指すのではなく、人々が語らう場を象徴している。つまりラボカフェは、大学と民間企業、一般市民ほか多様な人々が協働しながら対話の実験を行う場を意味している。

ラボカフェでは、平日夜の時間帯に、哲学、科学技術、芸術、その他多様なテーマに関するプログラムが提供されている。これらのプログラムに共通するのは、参加と対話である。「〇〇カフェ」と題される多くのプログラムではゲストスピーカーによる話題提供がなされるが、その場合もゲストの話が一方的に提供されるだけでなく、参加者の発言の機会ができるだけ多く設けられ、いわゆる「双方向のコミュニケーション」が重視されているのが特徴である。



【図1】京阪電車なにわ橋駅「アートエリアB1」で開かれる中之島哲学コレージュ/哲学カフェ「原発について何を考えるべきか」(2011年7月27日 進行役 高橋綾・辻明典)

■■2■ カフェとコレージュ

哲学カフェはラボカフェを代表するプログラムの一つであるだけでなく、今日「○○カフェ」と呼ばれる参加型イベントの原型となる活動である。そもそも哲学カフェは、1990年代にフランスで始められ、大学や知識人によって占有されている哲学的問題に関する議論を一般市民に開放する市民中心の運動であった。現在まで様々な国で様々なやり方で行われ、同様の主旨のもと、哲学に限らず科学技術など様々な専門的知識をめぐる議論を行う「サイエンスカフェ」が盛んに実施されている¹⁾。

哲学カフェの進め方にとくに定説といえるものはない。パリのカフェ・デ・ファールにて哲学カフェを長く続けたマルク・ソーテの著作がよく知られていることもあって、哲学者が参加者と討論するというやり方が参照されるようである。なお、ラボカフェで行われる哲学カフェは、関西圏において哲学カフェ活動をサポートする団体「Café Philo(カフェフィロ)」の流儀に則ってなされることが多い²⁾。それは、哲学者と参加者が討論するのではなく、一つのテーマについて、進行役の手助けのもと参加者どうしが対話を通して考えるというスタイルである。また、進行役は、研究者に限らず哲学を学ぶ者が担当することがほとんどである³⁾。

哲学カフェは、なにわ橋駅が完成する2年前から、工事現場のなかの特設スペースにて2006年、2007年と続けてラボカフェの一つの催しとして2回行われた。2008年に駅舎とともにアートエリアB1が完成し、ラボカフェプログラムが平日夜の時間帯に常設される。そ



【図2】連続で開かれる哲学セミナーの様子「『ツァラトゥストラはこう言った』を読もう(3)」 (2011 年8月3日 ガイド 菊地建至)

れにともない、大学と京阪電車など運営者側からも、哲学カフェを定期開催してほしいとの要望が出された。哲学カフェは、すでにCafé Philoなどの団体によって、関西圏の各地で定期開催されている。そこで、筆者ら主催者は、ラボカフェという枠組みの社会的意義を踏まえ、かつ、他所で行われている哲学カフェとの差異化も考慮し、哲学カフェのもともとの精神を活かし、哲学と市民が交差する場所を実験的につくり出す意図のもと、「中之島哲学コレージュ」という名称のもとで、単発ではないシリーズを企画することになった40。2008年10月から2011年9月までの、総実施回数は80回(2008秋冬17回/2009春夏11回/2009秋冬13回/2010春夏12回/2010秋冬12回/2011春夏15回)、うち「哲学カフェ」が34回、それ以外の「書評カフェ」や「セミナー」など多様な形式が46回である。

「コレージュ」は学校を意味する。それが「ラボカフェ」のシリーズプログラムの名称であることはやや奇異な印象をもたれるだろう。「コレージュ」は、フランス語で一般に学校を意味するほか、フランス特有の伝統において大学機関とは別の学府に対する名称として用いられてきた⁵⁾。コレージュという名称を提案したのは筆者の一人、本間である。単発の哲学カフェのような一期一会的な面白さだけでなく、連続したプログラムとして、プログラム提供者、参加者の双方にとって学びとなる空間を創出したいという考えが基本となっている。また、プログラムの企画実施についても、大阪大学は、コレージュという枠組み(実施回数の設定、外部講師の謝金支出など)を用意することだけに役割を限定し、主旨に賛同してコレージュに参画する協力者ができるだけ自由に実施内容を開拓できるように努めている。協力者の呼びかけは「中之島哲学コレージュネットワーク」を通して行われる。

中之島哲学コレージュが目指すのは、大学研究者のアウトリーチ活動や、従来の学部・大学院教育や専門教育とは一線を画する、真の意味で社会と大学の連携した教育研究活動の場の創出である。専門的研究・教育は研究科や学会などの様々な組織体系のなかで構築された権威と資格に基づいて行われるが、中之島哲学コレージュは、そのような権威や資格とは別に、企画提供者と来場者のコミュニケーションを最も重視した双方向の学びを追求する。

■ 中之島哲学コレージュ実施体制

筆者らはそれぞれ異なる立場でこのコレージュに関わっている。本間は、コミュニケーションデザイン・センター教員の立場から、ラボカフェ担当者の一人としてその場で生じる事柄に対する様々な責任を負いながら、総合コーディネータとして、前節で示したような大学および大学教員の新しい役割を社会に提示する役割を負っている。すなわち、それは専門的教育研究の組織のなかで形成される評価や資格とは異なる、現場型・参加型・相互変容型の学び・教育の場を提案しそれを実験していくことである。

実際の企画と実施を担当するのは様々な協力者たちである。現在、協力者の中心となるの

が、大阪大学大学院文学研究科臨床哲学を修了した者たち、とりわけCafé Philoのスタッフである。なかでも筆者の松川と小菅は重要な役割を果たしている。この二名は、各企画実施のための細かな調整にあたるほか、現場での席の配置やマイク回し、アンケート調査も担当している。哲学コレージュのようなプログラムを恒常的に実施するためには、教員だけでは力不足であり、Café Philoスタッフのように実務にあたる人員が不可欠である。これらの企画の補助から現場での対応まで、熟練を要する業務が求められるので、一時的な「アルバイト雇用」ではこの役割を果たすことはできない。これら実務担当者に対して十分な手当がなされることは今後の最重要の課題である。

個々の企画に関しては、先の臨床哲学研究室関係者、Café Philoメンバーのほか、様々な人々のよる協力のもとで実施されている。先に述べたように、来場者の反応をダイレクトに知ることにより、大学院生をはじめとする企画提供者は多くの学びを得ることができる。例えば、哲学コレージュでなされる哲学カフェは、対話の進行を学ぶ大学院生にとって格好の現場教育の機会となっている。多種多様な参加者のもと、教室で決して得ることのできない進行の注意点を上記スタッフのサポートを受けながら身をもって学ぶことができる。また、2011年からは、「セミナー」企画をより充実させ、大学の非常勤講師を勤める若手研究者に、一般社会人などを対象にした独創的な教育プログラムを開発する機会を提供している。このような試みは、入学や登録、資格や単位の認定といった制度なしに、教える者と学ぶ者が自由に出会うことのできる、現在は大学から失われつつある学習コミュニティの形成にもつながるだろう。

2 ひとは中之島哲学コレージュに何を求め、何を得るのか――アンケートを読み解く

■2個■ アンケートを通して聞こえてくる声

最近1年間(2010年9月~2011年8月)に中之島哲学コレージュへと訪れた参加者数は延べ1218名。この期間の企画回数は27回。企画一回あたり実に約45名もの参加者が訪れたことになる。一体、彼らは何を求めて中之島哲学コレージュに訪れるのであろうか。

それを探る手がかりとなるのは、アンケートを通じてわれわれに寄せられる参加者の感想である。2010年9月より2011年2月にかけて、われわれ中之島哲学コレージュのスタッフは独自に「中之島哲学コレージュへのご意見・ご感想等をご記入お願いいたします。」という質問文での自由回答方式のアンケートを作成し、調査を行った。その後2011年3月以降は、ラボカフェプログラム共通のアンケートが参加者に配布されることとなり、そのアンケートの最後の質問項目は「今回のプログラムで印象に残ったことなど、ご意見・ご感想をお聞かせください。」という自由回答方式の質問文となっていた。これら自由回答の感想に注目し、

参加者の声を読み解いてゆきたい。

回収されたアンケートの中には上記の自由回答部分が空白のものも含まれていたが、それらを除いた、「感想」が記載された回答数は、2010年9月~2011年8月の期間で合計624件であった。

感想をいくつか引用してみよう。

「知らない方々ともここまで深く話し合えることが驚きでした。」(2010年9月29日 哲学セミナー「TO PEG OR NOT TO PEG? |)

「相手の話を聞く事、視点を変えてみる事が具体的に理解できて良かったです。」(2011年4月22日 哲学セミナー「となりの認知症」)

「沢山の人の意見がきけてよかったです。こういう身近な日常の話をテーマにしてもらえると楽しいです。大変参考になりました。」(2011年6月8日 哲学カフェ「結婚したほうがいい?」)

●242 中之島哲学コレージュへの「不満」

全体的に見ると、参加者の感想はおおむね上記のような好評が多くみられる。しかしわれ われは、あえて「不満」の声に着目することにした。なぜなら、不満とは求めていたにも関 わらず得られなかったものへの欲求の表明であり、それゆえに彼らが哲学コレージュに求め ているものを映し出す鏡としての役割を果たすからである。

不満は大きく分類すると、「プログラムの長さと時間配分に関する不満」と「進行の方法に対する不満」の2種類に分類することが可能である。不満の種類はプログラムのカテゴリーにも関連性があり、前者は哲学セミナー(2011年2月23日の特別企画を含む)、後者は哲学カフェに多くみられる。

前者の「プログラムの長さと時間配分に関する不満」に含まれるものの中で、多くみられた不満の内容は4種類あった。第1に、「プログラム全体の時間を長くして欲しい」(4件)。中之島哲学コレージュは基本的に19:00~21:00の2時間のプログラムとして開催されることが多いが、より長い時間での開催を望む声が見られる。第2に、「ゲストの話を短くして欲しい」(6件)というもの。3つ目はこれとは逆に、「ゲストの話をもっと聞きたい」(5件)というもの。そして4つ目は、「対話をする時間がもっと欲しい」(11件)というものであった。なお、これら4種合計26件のうち、哲学カフェに対して出た不満はわずか3件で、哲学セミナーに対して出た不満が23件であった。

一方後者の「進行の方法に対する不満」に含まれるものの中で、多くみられた不満の内

容は6種類あった。第1に、「議論の範囲を絞って欲しい」(5件)というもの。第2にはこれとは逆で、「議論の範囲を広げて欲しい」(2件)というもの。3つ目は「議論を誘導して欲しい」(8件)、4つ目は「参加者の発言の内容をまとめて欲しい」(5件)というもの。そして5つ目が「発言者の偏りを解決して欲しい」(10件)というもの、6つ目が「議論を自分の求めている方向へ向けて欲しい」(6件)というものであった。なお、これら6種合計36件のうち、哲学カフェに対して出た不満が25件で、哲学セミナーに対して出た不満が11件であった。

上記の不満から、おおまかに参加者の求めるものが見えてくる。まず時間配分については、「ゲストの話をもっと聞きたい」が5件であるのに対し、「ゲストの話を短くして欲しい」と「対話をする時間がもっと欲しい」が計16件。この結果をみる限り、参加者は哲学コレージュに単にゲストの話を聞きに来ているというよりは、自分たちも話す立場に立つことができ、また他の参加者の話を聞くこともできる「対話」という活動を求めてやってくる傾向が強い、ということが見て取れる。次に進行の方法については、「議論の範囲を絞って欲しい」が5件であるのに対し、「議論の範囲を広げて欲しい」が2件。なされる議論の範囲が広がって行かないことより、議論の範囲が絞られず、議論が散漫になってしまうことに対する不満が強いようである。「議論を誘導」したり「参加者の発言の内容をまとめ」たり(計15件)することへの要求が高いことも同様の不満から発していると考えられる。また、特定の参加者に発言が偏ることへの不満も強いようである。

申之島哲学コレージュという「場」の持つ条件

中之島哲学コレージュに対して、なぜ上記のような不満が向けられるのであろうか。中之 島哲学コレージュという「場」の持つ条件を手掛かりとして考察してみたい。

申之島哲学コレージュは、「アートエリアB1」という開かれた空間で開催されている。参加形態も予約不要、入退出自由であるため、ふと通りがかった人が参加してゆくことも少なくない。その参加者は多様であり、男女比に大きな差はなく、年齢も下は20歳未満から、70歳を超えた高齢の方も参加する。職業も会社員の比率が高いものの、学生、主婦、引退後の方、医師や看護師などの専門職の方など、多様性に富んでいる。多くの方は日頃は哲学という学問に深く関わってはいない、いわば「一般市民」である。参加者数はテーマによって増減はあるものの、27回中24回が30~60名の範囲内である。また、各イベントの参加者のうち、約半数~三分の一程度が初回参加で、残りはリピーターである。大まかな傾向としては、リピーターの方が発言の回数は多い。中之島哲学コレージュは参加者の発言を中心においているため、そこで繰り広げられる対話内容は参加者に大きく依存する。上記のような、「多様性」をもつ「多人数」の「哲学を専門としていない」参加者によって、哲学コレージュにおける対話はなされている。

24 不満を読み解く

以上のような条件を鑑みて、参加者の不満を読み解いてみよう。まず、「プログラムの時間配分に関する不満」、特に「対話をする時間がもっと欲しい」について。参加者が数十人という状況では、仮に120分全てを参加者が話す時間に当てたとしても、参加者1人当たりが話せる時間は2、3分程度である。さらにゲストが話す時間がプログラムの半分近くを占めるとなると、参加者が話せる時間は半減してしまう。「プログラム全体の時間を長くして欲しい」「対話をする時間がもっと欲しい」といった不満が出るのは参加人数とプログラム時間の制約上、不可避であるとも言える。

次に、「議論の範囲を絞って欲しい」という不満についてだが、上記のように参加者が多様であるがゆえに、どうしても発言が多様化し、論点が拡散しがちな傾向になる。また、参加者のバックグラウンドの多様性は、使用している言葉の意味にも多様性をもたらすがゆえに、同じ言葉を使っているにも関わらず、発言がかみ合わない、ということが生じることがある。その結果として一部の参加者の混乱を招くケース(「コミュニケーションというのは幅が広く行動にも意味あいが多面的でマトリックス的になり何とも複雑な題だと思いました。(2011年8月26日 哲学セミナー「心を読む?言語的/非言語的コミュニケーション」)」)や、言葉を定義することに時間が割かれてしまうケース(「身ぶりの定義に終始して、話が発展しなかった」(2011年8月10日 哲学カフェ「身ぶりは何を語るのか?」))が生じることもある。こういった事態に対して、「参加者の発言の内容をまとめて欲しい」という不満が生じていると考えられる。また、あらかじめ定められたテーマの範囲内であっても、参加者ごとにどのような方向で議論を進めてゆきたいかについては意見が異なることがある。「議論を自分の求めている方向へ向けて欲しい」という不満が出る原因はここにあると考えられる。

参加者の多様性は、バックグラウンドや年齢、性別と言ったその個人に属するもののみではない。中之島哲学コレージュへの今までの参加回数にも大きな違いがあり、大まかな傾向としては、参加回数が多い参加者ほど、発言頻度が多い(「常連の方の発言力が強いと思いました。」(2011年2月2日 哲学カフェ「言葉で傷つくということ」))。このような偏りが生じる原因は、その場をより熟知しているために、発言することへの心理的抵抗が小さいからだと考えられる。そのために発言頻度が特定の参加者に集中してしまう、という状況はしばしば起き、結果として「発言者の偏りを解決して欲しい」という不満が生じることとなる。

以上のように、参加者の不満の多くは、中之島哲学コレージュという「場」の条件自体が発生要因となっている。参加者各々に議論を混乱させようとする意図などなく、全員が最善の努力を尽くして議論の構築に貢献しようとしているとしても、上記のような不満は場の条件によって不可避的に生じてしまうだろう。主催者や進行役の工夫、また参加者の成熟度な

どによって、不満の軽減が多少は可能であろうが、完全に取り除くことは困難であろう。

●245 中之島哲学コレージュとはどのような「場」であるのか

上記のように、参加者の多様性から生じる状況によって、不満を感じる参加者が現れるのは事実である。しかし、多様性がもたらすポジティブな面もまた存在する。例えばこういった意見がみられる。

「これだけ多様な背景をもつ方々が意見を言われるといろんな要素が出てきて、混乱もある分、いろんな可能性が出てくるのかもしれないと感じた。」(2010年12月8日 哲学カフェ「キャリア教育ってなに?」)

「意見がまとまらないところがいい! 色んな意見をきけてよかったです。」(2011年4月13日 哲学カフェ「気遣い」)

「人それぞれ、感じ方、とらえ方が違うのもおもしろかった」(2011年6月15日 新・哲学セミナー「ニーチェ『ツァラトゥストラはこう言った』を読もう 1)

多くの人々が日常の生活で行っている議論、すなわち会社での会議などは、多くの場合、何かを決定したり、何かについて合意したりすることをその目的としている。いわば、その議論に参加する参加者の意見の差異や対立を取り除いてゆくことが、その目的となることが多い。しかし、中之島哲学コレージュにおいてなされる議論は、かならずしも決定や合意というものを目的としていない。むしろ、参加者の意見の差異や対立を露呈させることが目的の一つであるといえる。

このような場では、あまり標準的ではない変わった考え方であっても無視されるということはなく、他の参加者に聞いてもらうことができる(「自分の意見に対し、多少なりとも首肯してくれることのありがたさ」(2010年11月10日 哲学カフェ「わたしのいのちはわたしのもの?」))。そのように露呈された差異や対立も、説得などを通じて取り除かれる必要などはない。自分の意見を変えることなく保つことは当然の権利として認められたうえで、自分の意見と人の意見との間に差異や対立があるということへの気づきを得て、参加者は帰途に就く。中之島哲学コレージュはそこに集う人にいくかの不満を抱えさせざるを得ない場であると同時に、またそこでしか得られない気づきを提供できる場でもあるのだ。

インタビューからみる中之島哲学コレージュ

■S■■ インタビューの目的と対象

2で示したように中之島哲学コレージュのアンケートには様々な感想が寄せられるが、これらの感想は主にその日のプログラムに関するものであり、中之島哲学コレージュがシリーズ全体として、あるいは連続した学びの場として、参加者にとってどのような意味をもつかを知るには不十分である。また、アンケートによく寄せられる感想は、より具体的には参加者のどのような体験に由来するのだろうか。たとえば、参加者が「いろんな人の意見がきけてよかった」というとき、様々な意見をきくことによってどのような体験をしてるのだろうか。「気軽に哲学に触れられてうれしい」というとき、そこで体験されている「哲学」とはどのようなものなのだろうか。

以上の2点について確かめるため、中之島哲学コレージュを開始した2008年当初から繰り返し参加しているリピーターの中から年代の異なる3名の方にご協力いただき、インタビューを実施した。インタビューの内容については、以下のような質問をとっかかりとした。

- (1) 中之島哲学コレージュに参加したのはいつですか? また、参加の動機・きっかけは?
- (2) 中之島哲学コレージュに何回も参加しつづける理由は?
- (3) 参加するようになって、哲学のイメージは変わりましたか?
- (4) 参加するようになって、あなた自身、変わったことはありますか?
- (5) あなたにとって中之島哲学コレージュはどのような場ですか?
- (6) 中之島哲学コレージュは、他のコミュニケーションや学びの場とちがうとところが あるとすれば、どういうところだと思いますか?

ただし、実際には3名全員がこれらの質問すべてに答えたわけではなく、それぞれの関心にしたがって、中之島哲学コレージュやそこで行われている対話について自由に率直な意見を述べてもらった。その結果、彼らの中之島哲学コレージュの捉え方、楽しみ方はそれぞれ少しずつ重なりつつも異なることがわかった。そこで、この章では、この三者三様の捉え方から中之島哲学コレージュ全体の特徴について考察する。

●C#2 生活に根ざした思考の場

大学時代哲学を専攻していたというKさん⁶ は、「大学を卒業し社会に出たあと、もう少し哲学というものを社会で生活しながら考えたい」と考えていたときに中之島哲学コレージュの存在を知った。それ以来、テーマや形式に関わらずほとんど毎回参加しつづけている。大学で哲学を学んだことのある参加者に、中之島哲学コレージュで行われている哲学はどのように映っているのだろうか。Kさんにその相違点を尋ねると、「ちがうというより、こちらのほうが本来あるべき姿に近い、今やるべき哲学と考えている」という答えが返ってきた。

K:大学のときは、過去の著名な哲学者の考えであったり、または思想というものを読み解いたり、研究したり理解することが、授業だったり大学での勉強だったんですね。ただ、それに対して僕はちょっとだけ不満をもってて、たしかにそれを知るのはいいけれども、それを知って、じゃあ「現代に、いま実際に生活している僕らがどうすべきか」ということにつながっているのかっていうと、ちょっと解離していると思う。でもコレージュにでると、実際にいま起こっている社会問題であったり、ちょっと深く考えてみたい疑問であったりっていうのを、その場にいる人たち、この社会で実際に生きている人たちと対話を通して考えることができる。対話を通して考えて、自分の意見が変わったり、または少し他の人と一緒だなという認識をもつことができる。(interview 2011.9.28)

大学での哲学教育・研究は主に文献読解を中心に行われる。過去の様々な思想家の思想に批判的検討を加えながら積み重ねられる理論は緻密で普遍性が高いように思われるが、その分抽象的で、現代に暮らす私たちの生活や社会との関連が見えにくい。それに対して、中之島哲学コレージュで扱うテーマは日常生活から、文化、科学、芸術、政治など多岐に渡るが、どれも私たちの生活や社会との関連が明確なテーマばかりである。「結婚したほうがいい?」(2010年6月8日哲学カフェ)、「話がかみ合わないとはどういうことか?」(2011年10月12日哲学カフェ)といった日常生活で誰もがふと感じたことがあるような疑問や、「生物多様性とビジネス」(2010年11月26日セミナー)⁷⁾、「社会人基礎力とは何か?」(2010年12月22日セミナー)、「原発について何を知るべきか?」(2011年7月27日哲学カフェ)⁸⁾ など、社会で話題になっている具体的な問題を積極的に取り上げている。私たちはそうした問題について、テレビや新聞、インターネットなどのメディアを通じて知ってはいるが、隣の人がどう思ってるかを知る機会はどうかというと、意外に少ない。中之島哲学コレージュは、そうした問題について、今ともにこの社会を構成している人たちと語り合う機会を与えてくれる。

Kさんが、このような場を大学でなされる緻密な文献研究より「哲学本来のあり方に近い」と考える根底には、「哲学の目的はよく生きることである」という思いがある。

K:対話を通して考えて、自分の意見が変わったり、または少し他の人と一緒だなという認識をもつことができる。そうすると、次の日からの行動が少しずつ変わるだろう、それもいい方向に変わるだろうっていうのが、僕のなかにあります。それは、哲学というものの、本来の目的だと思う。よく生きるという。(interview 2011.9.28)

Kさんは、哲学的思考が思考のまま終わるのではなく行動に結びつくことを望み、「たとえば誰かあのなかから政治家に立候補して、私はこういう方向にたとえば法律を変えたい、または政策を実行したい、そこまで具体的な方向に進んでいくことが、あの場における、一つの最終の目的だと思う」と述べる。しかし、偶然居合わせた人たちの集まりにすぎない中之島哲学コレージュが、何か実行に直結するような指針を決定するようなことはありえない。にもかかわらず、Kさんは、中之島哲学コレージュにおける議論に実践的な価値を認めている。それは、「絶対行動する前に、重大な決断をする前にじっくり考える時間、様々な人と意見を交わす時間が必要だ」からである。

K:哲学カフェは、じっくり考えることと、他者の意見と自分の意見を対話で交換し合う場だと思うんです。ですので、あの場で話し合って、いったん持ち帰って・・・・あの場で話し合ったことをきっかけとして、自分の行動が明日の行動が変わるんじゃないかなと思う。だから、あの場自体で何か行動することだったり決断することは、たしかにないと思うんですけれども、その後に個人個人が何らかの決断をして実際に行動に移すところまでが入ると思うんです。あの場の意義のなかに。(interview 2011.9.28)

中之島哲学コレージュは、直接決定を下す場にはなりえないが、だからといって議論のための議論の場に終始するのでもない。私たちの行動を触発するような思考の場として、実践的な意義をもつのである。

■台記 継続的な参加による変容

中之島哲学コレージュの実践的な価値を認める一方で、Kさんは、中之島哲学コレージュに対して「未完成な場であるという印象」を抱いてもいる。それは、議論が「あまりにも話がかみ合わないまま終わることが多い」からである。2のアンケートに関する分析で述べたように、参加者のなかには「いろんな人に意見がきけてよかった」、「もっとたくさん人の意見をききたかった」という人もいるが、Kさんは、「もう少し話がかみ合うようにしたい」

というタイプだ。そして、そのために「僕自身が回数を重ねて経験を積んで、もう少しあの 会が未完の状態から成長した姿をみてみたい」という思いがあるという。

そこで、実際に3年間参加し続けて変化はあったかどうか尋ねると、次のように答えてくれた。

K: 僕のなかでは、哲学カフェに参加してまず自分の意見を最初に述べることが当初の目的に近かったんですけれども、まず他人の意見を聞いて、そこからそれに対して自分はどう思うのか、その意見から自分の意見は近いのか遠いのか、自分の意見が遠かった場合、なぜその人と遠いのかっていうのを考えるようになりました。それで、その人に対する投げかけであったり進行役に対する投げかけができるようになったっていうのが少し成長やと思う。(interview 2011.9.28)

こうした変化は、彼の発言内容や、参加の仕方(発言を求めて挙手するタイミングや座る 席の選び方)にも現れている。参加し始めた当初は、(たとえ仕事で遅れて途中からやってきても)一番前の席に座り、進行役が発言を促すと最初に手を挙げ口火を切ることが多かった。しかし、いつの頃からか、後ろの席に座ることが多くなり、議論の最初に手を挙げることは少なくなった。そして、発言内容も自分の主張を展開するのではなく、先に発言した人に対する質問や、議論の流れについて提案するような発言をするようになった。このような彼の変化は、一見消極的なものに見えるかもしれない。しかし、彼自身はその変化を、継続的な参加による「成長」と評価している。最初のころは、「他人の意見をきく準備ができていない状態」で、「自分の言いたいことを言って完結」していたが、最近は「自分の発言を抑えることができるようになった」からである。

中之島哲学コレージュでは、毎回テーマも参加する人も変わるので、カリキュラム化された教育プログラムのように、全員が一斉にスタートし同じように成長していくことはない。毎回初めて参加する人が半数ほどいるため、議論の質が回を追うごとに向上するということも考えいにくい。しかし、継続的に中之島哲学コレージュに関わっている個々の参加者あるいは進行役に目を向けると、Kさんのように発言のタイミングや発言の仕方に明らかな変化がみられることがある。そして、そうしたリピーターのおかげで、進行役が助けられたり議論の質が変わったりすることがあるのは確かである。

もちろん、Kさんとは反対に、最初は他の人の意見を聞くことを楽しみに参加していた人が、何かをきっかけに自分の意見を発言するようになることもある。あるいは、他の人の意見をきいて感想を述べるだけだった人が、自分の主張を堂々と展開し議論の中心を担うこともある。変化の仕方も一様ではない。中之島哲学コレージュは、それぞれの参加者が異なる目的をもち、その目的に応じて、その都度、参加の仕方や議論への貢献の仕方を模索してい

る場と言えるだろう。

■S.4. 異なる考えに出会い、考えを組み直す場

Tさん⁹⁾ は、Café Philoが開く哲学カフェの参加者のひとりで、中之島哲学コレージュにも2008年の開始当初から参加している。当初は会社員だったが昨年2010年に定年退職され、民生委員の仕事や老人会などで都合が合わない日の他は、テーマや形式にこだわらず様々な哲学的対話に参加する熱心なリピーターである。彼はその魅力を、「出会いのおもしろさ」という。

T:僕は思い込みの強い人間で、毎回テーマについて「これはこうやろう」という答えを用意している。だけど、話してみたらとんでもない意見がでてきて、自分が頭だけで一生懸命考えてたことを組み替えざるをえなくなる場面に出会う。それに出会って、僕がどう組み直すかっていうところにおもしろさがある。終わってから、すごくしんどいんやけど、自分が単純に考えてるのとはちがう考え方、こんな考え方もできるんやっていうことを感じるんですよね。(interview 2011.9.13)

アンケートで「様々な意見をきけること」を中之島哲学コレージュの魅力として挙げる声は多い。だが、Tさんのいう「出会いのおもしろさ」は、単に自分とは異なる考えを知ることだけにとどまらない。他者との応答を通じて、自分の思考を反省し再構築してゆくプロセス全体が含まれている。この「とんでもない意見」との出会いによって起こる「思考の組み直し」について、彼はインタビューのなかで何度も言葉を変えながら語ってくれた。

T:普通は疑問を感じたら正解みたいなのがあって、この疑問に対する答えはこれよいうて僕らは習ってきたんやけど、本当はわかってないことのほうが多いんちゃうかな。そういうなかで、僕らは勝手に予想を立てて、これはこうやからこうなるはずやって思うんやけど、どっこいそうならない事実や意見がでてくる。(interview 2011.9.13)

T:だからそのわかってないっていう原点に戻りながら、「俺ってなんでこんなに簡単にこの問題を解決してきたんやろう」、「その問題も含めてもう一回考えなおしたるわ」って、もう一回一生懸命組み立てて、「こうじゃないですか」みたいな話をすると、またちがう反応が返ってきて、それがすごくおもしろいなと思います。(interview 2011.9.13)

これらのTさんの言葉から、私たちは、対話を通した吟味がどのようにして可能になる

かを知ることができる。Tさんによると、このような思考の再構築が起こるきっかけは、2種類ある。他の人の「とんでもない意見」をきいて「自分の考えを組み替えざるをえなくなる」場合と、「自分が何気なく言った言葉に対して自分が思ってなかったような意外な反応が返ってくる」場合である。Tさんのインタビューでの発言を借りると、この2種類のきっかけを通して参加者は、(1)自分とは異なる「とんでもない考え」に出会い、(2)「わかっていないという原点に戻りながら」、自分の考えの「甘っちょろさ」を反省し、(3)「こうだ」と思った思考を「もう一回一生懸命組み直す」。(4)そして組み直した考えを再び他の人に提示し、(5)それに対する他の人の反応がきいてまた組み直す。これを、中之島哲学コレージュの議論では幾度も繰り返す。

中之島哲学コレージュは、様々な意見を出し合うだけでなく、異なる思考を通して自分自身の思考を反省し、思考を再構築しうる場なのである。

■6月5 出会いを可能にする自由

それでは、中之島哲学コレージュで、普段は出会わないような「とんでもない意見」に出会えるのはなぜだろうか。よくアンケートに寄せられる、「普段は話す機会がないような年代、職業の人と話せる」ことも、その理由のひとつだろう。しかし、他の場では出会わないような意見に出会える理由として、単に普段話す機会のない異なる年代の人が居合わせるからからという説明だけでは不十分かもしれない。中之島哲学コレージュで「とんでもない意見」に出会えるもうひとつの理由として、Tさんは発言の自由を挙げる。つまり、「絶対、この問いに対してはこの答えじゃなければならないっていうのがなくて」、「こんな考えもある、あんな考えもあるっていう仕掛け」があるから「思ったことを言える」というのだ。

T:とんでもない意見がでても、それもそれで、「この意見のこういうところがおもしろいね」ってちゃんとフォローされてるし、「これでいいんかな」と迷いながら出したことに対して「おもしろいな」っていう反応もあるし。だから、世間のなかで言うなたら絶対笑われるようなこともあの場では言える。「そんなんいうたらあかんあかん」て無視されるんじゃなく、「それはテーマにどういうふうに関係するの?」って進行役がききますやんか。そうすると、発言した人の、なんていうか自尊心が保たれるいうか、「来てよかった~」って思える場所になる。(interview 2011.9.13)

このように、自分の発言や考えを受けとめ反応してくれる他者がいるから、参加者は、 「恥ずかしい」とか「馬鹿にされないか」と思うことなく発言できる。それが、「とんでもな い意見」や「新しい考え」との出会いにつながっているというのである。

それは、決して、どんな主張も無条件に受け入れられるということを意味するわけではな

い。中之島哲学コレージュでは、どんな発言も排除されない代わりに、どんな発言も批判的検討の対象となりうる。理解できない発言に対しては他の参加者や進行役から質問が投げかけられるだろうし、偏った意見に対しては厳しい反論も出るだろう。だからこそ、主催者も極端な主張や偏見ととられかねないような発言を過度におそれることなく、自由に発言してもらうことができる。

全に 自由さゆえの不完全さ

Fさん¹⁰⁾ は、セミナーや書評カフェにも参加する金森さんや他人さんとは異なり、「他の参加者からはどういう意見が出るのだろうという興味から」哲学カフェを中心に参加している。他にも、様々なテーマでのコミュニケーションや学びの場に参加しているという彼女は、中之島哲学コレージュが他のそのような場と異なる点として、「自由さ、気軽さ、不完全さ」という特徴を挙げてくれた。そして、Fさんは二種類の自由を考えている。

F: ひとつは、入場、退場が自由なところ。もうひとつは、哲学カフェが進行していく中、あるキーワードで話がフォーカスされ進んでいるときに、別のキーワード・視点で話が進みだす時があることです。進行役の方が交通整理をされる時もありますが、流れをその場の参加者から出る意見に任せているところに、「自由さ」を感じます。(interview 2011,10.9)

ひとつめの入退場の自由は、彼女が中之島哲学コレージュの第二の特徴として挙げている「気軽さ」につながっている。そしてもうひとつの「自由さ」は、第三の特徴として挙げられている「不完全さ」と裏表の関係にある。Fさんは、中之島哲学コレージュの「不完全さ」を「その自由さ故の不完全さ」であると指摘し、次のように述べる。

F:他にも、様々なテーマでの他のコミュニケーションや学びの場に参加しますが、それらには、何がしかの「ゴール」がある。「あるキーワードで話がフォーカスされ進んでいるときに、別のキーワード・視点で話が進みだす」ということがありません。私が感じる不完全さが哲学カフェの醍醐味かもしれません。しかし、私には不完全さ、歯切れ悪さ、収まりの悪さに感じられることもあります。(interview 2011.10.9)

Fさんが指摘するように、中之島哲学コレージュのプログラムは多くのワークショップや会議で行われるコミュニケーションと異なり、結論を出すとか合意を形成するといった明確なゴールとなるような到達目標が定められていない。そして、何についてどういう順序で話すかということも決められていない。その日のテーマに関連のある限り、テーマのどこに焦

点が絞られるかはその場で出される発言次第である。中之島哲学コレージュでは、進行役だけでなく参加者も「この点についてもっと話し合うべきではないか」、「~について他の方の意見もききたい」といった提案をすることができる。あるいは、そのような提案をしなくとも、他の参加者の関心を惹く発言によってそれまでの議論の流れが大きく変わり、テーマを設定した進行役も予想しなかったような方向に話が進むこともある。これは、Tさんが言及していた「自由」と関連はするが、それぞれが注目している点は少し異なる。Tさんが言及していた「自由」は個々の発言内容の自由だが、Fさんが言及しているのは個々の発言内容ではなく議論の流れが予め定められていないという意味での「自由」である。中之島哲学コレージュにおける議論は、どんな発言内容も制限されないという意味だけでなく、議論の方向が参加者の発言にまかされているという点でも自由なのである。

しかしそれゆえに、中之島哲学コレージュで行われる議論は、ある論点をめぐってなされていた議論が他の論点の出現により十分に議論されないまま流れてしまうこと、なかなか中心的な論点が定まらず話があちらこちらに飛びながら進むことも多い。彼女がいう、「歯切れの悪さ、収まりの悪さ」は、そのことを指しているのであろう。

予め到達すべき「ゴール」が設定され、それに到達するために必要な手順がきちんと組み込まれたプログラムに比べると、何についてどういう手順で話し合うかがプログラム化されず、議論の流れがその場の偶然性にまかされている中之島哲学コレージュは、たしかに「不完全」かもしれない。しかしそれが、多くの人が中之島哲学コレージュの魅力として挙げる「自由さ」につながっているのである。

4 コミュニケーションとしての哲学

これまでのアンケートとインタビューに関する考察から、中之島哲学コレージュはいくつ もの多様性が交錯し、多様性を浮かびあがらせる場といえる。

中之島哲学コレージュには、年齢や職業、知識や経験、考え方、関心の異なる様々な人が 参加しているだけでなく、参加するのが初めてで公の場で議論することに慣れていない人も いれば、何度も参加しているリピーターもいる。また、そのような参加者たちは、同時に満 たすことのできない多様なニーズを抱えている。

さらに、そこには、多様な参加の仕方がみられる。積極的に発言の機会を求める人もいれば、他の人の意見をきくことに徹する人もいる。同じ参加者のなかでも、継続的に参加しつづけるうちに参加の仕方や目的に変化が生じることもある。中之島哲学コレージュの参加者たちは、同じ時間、同じ場所、同じプログラムに参加しているからといって、みな同じ仕方で参加しているわけではない。それぞれの参加者が異なる目的をもち、その目的に応じて、

その都度、参加の仕方や議論への貢献の仕方を模索している場であるといえる。

そしてこれらの多様性の条件となっている、多様な参加者をひきつける日常生活や社会との関係が明確なテーマと、3つの自由(入退場の自由、発言内容の自由、議論の流れが参加者の発言に任せられているという意味での自由)がある。

中之島哲学コレージュにおけるこれらの多様性は中之島哲学コレージュを可能にしている 場の条件と切り離せないものであり、参加者は否応なく、これらの多様性と向き合わざるを えない。

ところで中之島哲学コレージュにおける「哲学」とは何を意味するだろうか。筆者らにとっての共通の出発点は臨床哲学である。臨床哲学とは、予め原理や定義として与えられるものを哲学とするのではなく、ある具体的な場で誰かとともに作られるものを意味する¹¹⁾。中之島哲学コレージュにおいても、授けられるべく予め用意された哲学はない、といっても過言ではない。実際の様子を覗いてみればすぐに分かるように、ある一つの情報や知識が提示されると、それが実に様々な仕方で受け取られるのが観察されるだろう。教室のなかでの、一方向的な知識の伝授では、理想の聴き手が想定され、そのような多様な理解は通常表面化することはない。対話を重視する中之島哲学コレージュでは、一つの発言に対して様々な応答が返されるため、多様な理解が並存するという問題に誰もが直面せざるを得なくなる。

人間の社会的な実存を考慮しない哲学の立場をとれば、例えば厳密な論証だけが優先され、コミュニケーションのプロセスは二次的あるいは本質的ではないものとみなされるだろう。中之島哲学コレージュにおいて、それは逆転される。つまり、コミュニケーションが優先されるのであり、しかもそのコミュニケーションは、十全な相互理解によって完成されるものではなく、むしろ、誤解や別様の理解を産出しながら、問題を拡張するプロセスとして捉えられる¹²⁾。この場合、問題を解消するのではなく、問題を問題のまま展開・拡張することが哲学の役割となる。

中之島哲学コレージュにおける哲学は、学問の頂点あるいは根本に位置して、学問を裁定・基礎づけする役割をきっぱり捨て、リチャード・ローティのいうところの「対話」、しかも、学問や研究どうしの対話ではなく、生身の人間の会話を出発点にする(Rorty [1994] 379)。中之島哲学コレージュに参加する人々は多種多様であり、会話が進む方向も一つにはならない。この方向が一つに定まらないということこそが、哲学を要請し、思考することに課題を与えるのである。

注

1) 2004年に『平成16年版 科学技術白書』のコラム記事で英国の"Café Scientifique"が

紹介されて以来、日本でもサイエンスカフェが広く知られ、開催されるようになった。その経緯と広まりは中村「2008」に詳述されている。

- 2) Café Philoは、大阪大学大学院文学研究科の教員・学生・修了生が中心となって結成された民間団体。京阪神地区を中心に関東・東北地方まで、全国の哲学カフェ活動の交流やネットワーキングにも力を入れている。cf. www.cafephilo.jp
- 3) 哲学カフェにおける進行役の役割については、本間・高橋・松川・樫本 [2007] を参照。また、Marinoff [2002] は「哲学プラクティス(哲学相談)」の観点から、哲学カフェを「グループでの哲学」として位置づけ、そこでの哲学者の役割を論じている。
- 4) 中之島哲学コレージュの2009年度までの活動報告については、本間・松川 [2010] を参照。また開催された内容一覧はCafé Philoのウェブサイト (www.cafephilo.jp) で閲覧することができる。
- 5) フランスにおける学問権威の多様化のために「コレージュ・ド・フランス」が果たしている役割については、猪木 [2009] pp.260-266.を参照。またジャック・デリダら哲学者たちによって創設された半官半民の「国際哲学コレージュ」という組織については、西山 [2011] による映像ドキュメントと解説を参照。いずれのコレージュ場合も、研究と教育が主たる目的である。
- 6) 20代男性、会社員。インタビューは2011年9月28日(金)の中之島哲学コレージュ終了後に、会場近くの喫茶店で1時間半程度行った。
- 7) 2010年10月名古屋で開催された生物多様性条約第10回締約国会議に関するテーマ。
- 8) 2011年3月11日の東日本大震災によって発生した福島原発事故に関するテーマ。
- 9)60代男性、無職。インタビューは、2011年9月13日(水)の中之島哲学終了後に、会場近くの喫茶店で1時間半程度行った。
- 10) 女性、会社員。インタビューは、2011年10月8日から2011年10月9日に2回にわたってメールにて行った。2回目のメールでは、1回目の回答について質問を重ねるかたちで、さらに詳しく中之島哲学コレージュの特徴について聞いた。
- 11) 臨床哲学の成り立ちや展開については、本間・中岡 [2010] に詳述されている。
- 12) これはニクラス・ルーマンによる「コミュニケーションのオートポイエーシス」という 考えに基づいている。cf. Luhmann [1997] chap.1, sec.6. また、ルーマンに基づき、「コミュニケーション」を同一性を前提にした情報移送の過程ではなく、差異を展開する過程として考察したものとして、本間 [2000] を参照。

文献表

猪木武徳(2009)『大学の反省』NTT出版.

本間直樹(2000)「コミュニケーションの有り難さ」平成11年度科学研究費・基盤研究(B)

(1) 研究成果報告書『倫理学のアカウンタビリティ』

本間直樹・中岡成文(2010)『ドキュメント臨床哲学』大阪大学出版.

本間直樹・高橋綾・松川絵里・樫本直樹(2007)「哲学カフェ探究――活動とインタフェイス」『臨床と対話』(大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」研究報告書2004-2006第8巻)。

本間直樹・松川絵里 (2010)「哲学という名のプラットフォーム――ラボカフェ/中之島哲学コレージュ」, Communication-Design 3, 2010.

Luhmann, NIklas (1997) Die Gesellschaft der Gesellschaft, Suhrkamp.

Marinoff, Lou (2002), Philosophical Practice, Academic Press.

文部科学省(2004)『平成16年版 科学技術白書』.

中村征樹(2008)「サイエンスカフェ:現状と課題」科学技術社会論学会編『科学技術社会 論研究 第5号』玉川大学出版部所収.

西山雄二 (2011) 『哲学への権利』 勁草書房.

Rorty, Richard (1982) Consequences of Pragmatism = (1994) 室井尚ほか (訳)『哲学の 脱構築』御茶の水書房.